疎開道路

生野・桃谷帖 II

職業編

はじめに

ちょうど１年前に「マチオモイ帖　生野・桃谷帖」を制作しました。

内容は、私の子供時代の思い出と、近隣の環境や人たちを題材とさせて頂きました。

２回目の今回は、主に昭和45年の大阪万国博から以降、地域の職業を通した周辺の方々を取り上げてみました。

編集にあたって現地周辺で取材もしましたが、その際当時の同級生からは「おまえ、そんなくだらん事よく覚えているなぁ～」と言われました。

「そうかぁ～」特別意識していた訳では無いのですが、街をぶらぶら歩きながら、文章を書いていると、次々と当時のシーンが克明に蘇ってきます。

生野区桃谷の「疎開道路」周辺ですが、みゆき通りのコリアンタウンや鶴橋駅周辺は、昔と変わらず賑やかです。

疎開道路を南へ下った勝山地域は、高齢者の多い静かな町になっています。

いずれも、当時と比べて、街並みだけはあまり変わっていません。

時の流れとともに、もう見かけなくなり、復活する事も無い、当時の職業や商売人を「職業編」としてまとめてみました。

文中に出てくる「工場」は「こうば」です。「こうじょう」ほど大掛かりでなく、「作業場」よりやや大きいものづくり場を、みんな「こうば」と言っていました。

大阪弁の文章ですから、他の地域の方にはわかりにくい表現もあると思いますが、どうぞご容赦ください。

疎開道路（生野区鶴橋周辺）

桃谷商店街（生野区桃谷）

国際市場（生野区鶴橋）

街角の町工場跡（生野区勝山北）

嗚呼！阪神タイガース

近所に記章（きしょう）やバッチを製造している職人さんがいました。七宝焼を使った高級品から社章、校章…色々と製造していました。

昭和48年　阪神タイガースは、江夏豊を中心に優勝街道をひた走っていました。当時のタイガースと言えば、お家騒動ばかりが目立ち、成績はパッとしない。ファンのストレスもピークになっていた。そんな状況での滅多に無いチャンス。

気の早いファンは、もう勝った気になっている。そんな空気が流れていました。

そして、ここの記章工場に「阪神タイガース優勝記念メダル」の発注がありました。

元々、熱狂的な阪神ファンだった大将。

「光栄な事や」と言って嬉々として、引き受けました。

朝に会えば「阪神勝ったな」「アカンがな」

巨人ファンに出会うと

「巨人なんか、子供や、野球知らんアホが応援するチームや」。工場前を通ると、かなりの音声で阪神の実況ラジオがいつも聞こえてくる。

典型的な「虎キチ」です。

しかし優勝となると、Xデーに併せて、早めの製作と、かなりの数量が必要になる。

「カンつけ」やシール貼り…近所の人たちも優勝を念じて、内職で手伝いました。

ところが、肝心の阪神タイガース。

残り試合が少なくなるにつれ、雲行きが怪しくなってきた。有名な池田選手の落球～残り2試合で1勝ができない。

「祝！優勝記念メダル」は出来上がっている。

次第に大将の顔色も悪くなってきた。

そして優勝は、巨人との最終戦にもつれ込みました。私は中学生でしたが、みんなラジオとイアホンを持って、学校でデーゲームの実況を聞いていました。

結果は早々と上田次郎が打ちこまれ9対0の完敗。ジャイアンツの高橋一美に完封を許し、本拠地 甲子園で巨人にV9を献上しました。

試合終了と同時に、ラッキーゾーンを乗り越えた客が、タイガースの余りにふがいない試合ぶりに激昂して、一斉にグランドになだれ込む、世界の王選手にまで暴力をふるうという汚点まで残しました。

後味の悪さは球場だけではありません。

問いかけても返事が無く、非情なドンデン返しで、茫然と佇む大将に近所の人が、

「コレ、どうすんの?」と聞いた。

いくらかは発注元が持つでしょうけど…

処分もしないといけないし、内職費も払わないといけない…。

駐車場に山積みになった段ボール箱の前で、大将がうわ言のように

「くそっ!タイガースは殺生や、バクチよりタチが悪い。もう辞めた。辞めた。アホんだらぁ〜!」

…次のシーズン早々、大将の工場前を通ると…

「アレッ?」何事もなかったように、ラジオからは阪神の試合実況が流れ、中を覗くと縦ジマの帽子をかぶり、黙々と仕事をする大将の姿が?。

惚れたが因果
虎キチは花も嵐も踏み越えて。

幻の優勝からさらに 12 年後、ついに 21 年ぶりの優勝を果たした時の記念メダル。
大将の工場で作られました
「大将良かったでんなぁ」皆で喜びました。

※七宝焼（しっぽうやき）：伝統工芸の金属技法。
※カンつけ：メダルと鎖をペンチで繋ぐ工程。

町の薬局

現在も営業中ですが、ここのオッサン。無防備に店の前を通ると、ニコニコしながら優しい声で近ついてくる。

「ちょっと奥さん」「ちょっと姉さん」とお婆さんを呼び止め、いきなり「顔色わるいけど何かあったん」が始まります。

そして「疲れているみたいやけど大丈夫？」などと言い、二言三言と言葉のやりとりの後「何を言うてはんの？まだまだこれからやがな」と続き、最後に「実はよく効く薬があるんやけど」「これ飲んだら若返りまっせ～」と、話し内容の症状に併せて、いろんな薬を売るのです。

さらにすごいのはマッサージ屋と連携している。1人の客に対して、ボディケアまでフルサービスで「おもてなし」をしています。

儲けて隣にビルも建てましたが、この建物は陰で「年金住宅」と呼ばれています。

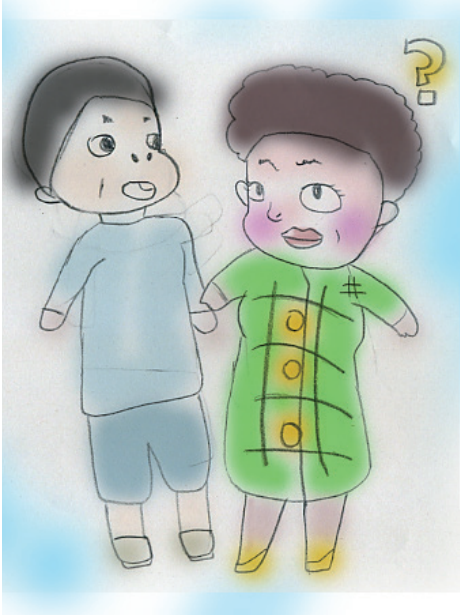
婦人服専科

若旦那。両親と一緒に経営しています。店員さんがいないと、稀に本人が店番をしている。

スカートを体に当ててる客が
「すいません。ウエストちょっと、どうかなぁ？」
女性をジロッと見るなり
「小さいんちゃいます。それ9号ですよ。」
そして余計な一言も「ウエスト出したら、入らん事はないと思うけど。奥さん、12号ぐらいあるでしょう？**生地が足らんと思うわ**」
何の気遣いも無く、乙女心？を逆なでしよる。

今度は、背の低い太った女性が入って来た。熱心にコートを見ている。
グリーンのコートを指さし「ちょっと派手かネ？」
「派手には見えませんよ」「着てもいい？」「どうぞ」
…おおっ！珍しくちゃんと接客してるやん。
客が前を向いて鏡で見る「ピッタリかなぁ」。

後ろを見て、顔をヒョコっと若旦那に向けて
「どう？」



「う～ん。何かミドリガメみたいですなぁ～」
「…」。
そこへ店主のお母さんが帰って来る。

「うっあっ」店に出ている息子を見て顔が曇る。
「ああ、いらっしゃいませ」客も大阪のオバサマです。
怒笑いで「ホンマ何やのん、あの男」
「すんませんねぇ。自分の嫁がぶっさいくやから、綺麗な人を見るとすぐ嫉妬しますねん。
奥さんお綺麗やから。フォッフォッフォッ（笑）」
どんなフォローや。
若旦那、本職はレディス仕立てをやっている。
「女性の体形を見たら服がつくれる」と豪語していて、コチラの腕は確からしいが、アチラの腕はサッパリ現在も独身。そらなぁ。これじゃーなぁー。
商店街のイベントで「日韓フェア」というのがあり、ついでに北朝鮮も含めて、地域的に「朝鮮半島フェア」でどうや？ 補助金出すで？ との行政提案に
「日本人を拉致してる国を、何で応援するんや」
と一蹴しよった。ええとこあるんやけどネ。

だんじり造り

私の住んでいた地域には神社が無く、祭りとなると少し離れた弥栄神社や、御幸森神社から来る「だんじり」を眺めているだけ。
「ああ、自分達も引っ張りたいなぁ」
「屋根の上に乗ってあばれたいなぁ」そんな思いがあり、そうや、だんじりを造ろうという事になった。
近所には、金属関連から木工所まで小さな町工場が多く、そこの息子たちと一緒に、皆が材料や道具を出したら、お金もそれほどかからないやろ。
まず、パーツ担当を決めます。
私の家は金属工場なので、車輪を支えるシャフト担当。工場主の祖父に言うと
「ハァ？そら、むつかしいで？」とか言いながら、真鍮の棒2本を特注してくれました。
木工所の息子は、ロクロが有るので車輪。

くだもの屋は、ボディになる木の箱。作業服屋はロープ。畳屋はそのまんま。
と言うように材料担当が決まっていったが、だんじりについている、木彫刻をどうすんねん？
という事になった。
「あっ、俺の家にあるで」酒屋のボンクラという綽名の友だちが言ったので、彼に任せる事にしました。
しばらくして、だいぶ土台が出来上がって来たのでボンクラに「彫刻まだか？」と聞くと、
「家にあるのやけど、一人では持ってこられへん」
と言うので家まで行きました。
それは家の客間、障子の上にある欄間の事でした。
「これはアカンやろ」「怒られるでお前」
「かめへんねん」「オカンにも言うてるし」。
「ほんまかいな？」「こいつ大丈夫か？」
結局必要やし、外そうという事になりました。
ところが、これが中々外れない。
「天井裏に上がらんと、無理ちゃう？」
仕方がないので、私が押し入れの天板を外して、狭い天井の中に入りました。
中腰で歩くと「メキメキッ、メキメキッ」と音がする。悪い予感がしたが、背に腹はかえられへん。
下ではボンクラが金槌で鴨居をたたきだした。
「エライ音やなぁ」と思いながら天井を移動していると「ガラガラ」大きな音がして、
「お前ら家つぶす気か！」ボンクラ親父の声やん。
エライ怒っているし、あのアホ、やっぱり親に言うてなかったんや。
焦ってバランスを崩し、板を踏んじゃった。
「メリメリ、バキッ！」

天板が割れて下へ落下しました。

「うわっー」「ななな…何やお前」

親父は目をむいてびっくりしていました。

「あーあ。作戦中止や」ボンクラ親父に謝って後は知らんで、帰りました。

そんな事もあり、彫刻はあきらめ、何とか形だけは完成したが、彫刻が無いと、どう見ても出来損ないの夜鳴きソバ的な屋台にしか見えん。

まあ、せっかく作ったんやから、町内で引っぱろうという事で、5～6人が引き手、私と乾物屋が、だんじりモドキの中に入った。

長さ2mぐらいの屋台で、中は狭いし、引いている奴らも、誰も注目してくれない、しんどいだけで、面白くなかったのでしょうね。ダレてきました。

さらに桃谷駅近くになると、上町台地に向かって坂になっている。

「アカンもう限界や」

「さっき同級生の女子に笑われた」

などの不満も出てきました。

「おいっ、目の前に坂やで」桃陽小学校前の坂です。

「あーあ、やっと楽ちんできるわ」などと言っている。

すると、突然、傾斜が急になり、振動も増して来た。

「ガクン、ゴロゴロゴロ」スピードも上がった。

怖くなって飛び降りようとしたけれど、りんご箱にスポッと入った状態なので体が抜けない。

必死で止めようとしていた引き手も、後ろから迫る屋台が怖くて手を放しよった。

今さらやけど、ブレーキ作るのを忘れてた。

「うわぁー」「バキバキバキ」箱と一緒に道に転がり出ました。

あまりに品祖な屋台なので、振動で箱から下が外れて、車輪部分だけが坂の下まで転がって、石垣にゴツン。

「ああ、こわー。死ぬか思ったわ」

バラバラになった部品を下げて帰ると、手伝ってくれた数人の大人も集まってきた。

果物屋の親父が「人間が乗っても壊れん木箱。まだまだ使える。もったいない」と持って帰りました。畳屋も「テレビ見る座布団にちょうどエエ大きさや」「今度はひかり号作ったらどないや。ハハハハハ」

昆虫と爬虫類販売

当時の大阪市生野区は、今の中国のように「光化学スモッグ」がよく発生していました。発生すると注意報、警報とレベルが上がります。校庭に赤い旗が立つと学校で遊べなくなり、帰っても外出を控えるようにと連絡が入りました。

そんなもん子供には関係ないのですが、やっぱり近所では遊ばれへん。

そこで、退屈な子どもは、緑の少ない大阪を離れて、虫や爬虫類を求めて、あっちこっち行きました。

中学生になりたての頃、昭和町近くの桃が池で、大量にザリガニを捕ってきたので、家の前にタライを置いて、友だちや興味のある通行人に配っていました。

そこに金魚屋のオヤジが、たまたま通りかかり「今度、虫やザリガニなど捕ってきたら、ワシところで販売してあげるで」と言った。

別に興味もなかったのですが、「古銭」というあだ名のついた友だちが妙に熱心で、売ってもらう事になった。

「古銭」はあだ名の通り古銭や切手を集めていて、いつも「これはナンボで、これは高い」とか、子どものくせにお金に執着心が強い。

金魚屋オヤジに詳しく聞くと、特に「イモリ」や「タガメ」はそこそこの値段で引き取るで。

それを聞いた古銭。えらい色めきたちました。

「どこに行ったらおるんやろ？」

図書館の辞典で調べたがわからん。

結果、金魚屋に聞いたらええんや？

と言う事になり、皆で聞いた。

「タガメは水田におるんやけど、農薬の無い所でないとアカンからなぁ。今は、相当減ってるで」

「どこ？」

「わかっとったらワシが行くがな」

「イモリは水のきれいな谷川」「そうや、前に持ち込んだヤツが、金閣寺で見つけたと言うてたわ」

「よし、まずは金閣寺や！」

「どこや？京都や！」子供は行動が早い。

網と砂糖の一斗缶（いっとかん）を改良した生き物いれを持って5人で出かけました。

京阪三条までは京阪電車でたどり着きましたが、金閣寺がどこにあるのかよくわからん。

何度も人に道を聞きながら、昼を大きく回った頃に、ようやくたどり着きました。

「入館料がいるやん」「はぁー疲れた」とか言いながら、金閣寺の池の周りをウロウロ探しましたが「イモリ」なるものは見当たらない。

だいぶ探してあきらめかけた頃、突然、名人と呼ばれていた友だちが、水の湧いている所を指さして「アア～。アア～」と言いよった。

そこには、一見おたまじゃくしのようで、水面と

池の中を往復しているお腹の赤い生き物が。
「見つけた！イモリやん」かなりの数がいるが、ちょっと池に入らんと網が届かない。
「しかし、池に入るのはアカンやろ？」
ここは、子供でもわかる禁断の雰囲気がある。
少し向こうでは金閣寺を背景に、外人が写真撮影

をしている。
「あっ！」とにかくお金にしたい古銭は、ズボンをたくし上げて池に入っていきよった。。
「こら、もうしゃーない」
何度か網ですくって、さっさと逃げよ。
それから、ほんの数分後、
「アカン！」見張り役が鋭く言いました。
そして、入口の付近からザワザワと人の動きが…
そばに居た団体客に紛れて、大回りして途中で警備を含めた職員とすれ違いながら、何とか外に出ると、すでに古銭と名人が待っていました。
「こいつらプロかっ。素早い」
大阪へ帰り、金魚屋に持って行くと
「おおっ！大手柄やん。由緒ある 値打ちもんや。
なんせ 国宝出身やからな！」

何故か褒められ、小さめで残った2匹を自分で飼った。近所にあった井戸で朝夕に水をかえ、餌は赤子(いとみみず)。2年ぐらい生きていました。

タガメは枚岡の溜池で見つけましたが、亀と一緒の水槽に入れたら食われました。

亀は四天王寺の亀池で捕りました。孵化してまもない銭亀は、池の真ん中にある砂場にいて、池の淵からジャンプして飛び移りました。しかし、帰りは淵の方が高くて戻れない。立ち往生し、坊さんに見つかって、エライ怒られた事もありました。

夏の日暮れ、鶴橋駅から近鉄奈良線の普通電車に乗って、枚岡、額田、石切、生駒、富雄まで順番に降りて、駅の電灯に群がるカブトムシやクワガタ虫を捕りました。間違えてクマンバチに刺されて、手がグローブのように腫れた事もありました。

その頃は、虫だけでなく、家でいろんな生き物を飼っていました。

セキセイインコに鳩。鳩が舞う四天王寺が近いので、エサを求めて、恐ろしい勢いで増えて行きました。結局、近所から苦情が出て、やめさせられました。

鳴かない鈴虫

最初は、どっかから10匹程度捕ってきたのですが、どんどん増えて、3年目ぐらいになると、水槽2ケース一杯になりました。

秋ごとに涼しい音色を聞かせてもらっていましたが、5年目ぐらいから余り鳴かなくなり、7年目には全く鳴かなくなりました。

鳴かないなら**便所虫**と変わらんやん。

鈴虫が羽を擦り合わせて音を出すのは、メスに対する求愛です。

狭い水槽の中はメスも多い。あえて鳴かなくても隣にメスが居る。そんな事情でしょうかね。

人も虫も同じですかね？トウが立った男女の姿。

ガマガエル

もう廃園しましたが、宝塚ファミリーランドの池に、大きなオタマジャクシが沢山いました。50匹ぐらい？家へ持って帰り、屋外にあった鰻や亀と一緒にブロックで作った池に入れました。

そのうちの大半は酸素不足で死にましたが、２匹だけが立派な牛ガエルに成長しました。

ある日、大雨が降った翌日に池を見ると「いつかは、かば焼きに」と、楽しみにしていた鰻とともに姿が消えていた。

「あーあ残念。きっと下水で暮らしているんやろ、まあしゃないなぁ。」と思っていました。

数か月経って、法事か何かで、家に何人か親戚が来ていました。

「うギャー！」

断末魔みたいな悲鳴が聞こえ、見に行くと、トイレの扉からおばさんが、うんこ座りの体勢で白目をむいていました。

発作か何か、体の異変が起こったと、皆が心配して助け起こしました。

そして、おばさんの正面、和式便器に目をやると…

「おおっ！」里がえりの牛ガエルが、目をパチパチ。金隠しの上にチョコンと座っていました。

禁じられた遊び

遊び友達で、虫の好きな兄弟がいました。

最初は、カブト虫などの甲虫をカゴや水槽で飼っていましたが、バッタ、セミまでを採集するようになり、どんどんエスカレートして、それらの虫を自分の部屋で放し飼いにしていました。

彼らの父は音楽家で、スペインでナルシソ・イエペス氏についてギターを学んで帰国した。そんな縁で、イエペス氏が来日して彼らの家に来ました。

著名な音楽家が来るという事で、近所の子供達や、父兄も彼らの家に行き、イエペス氏と卓球をしたりホームパーティのような感じでした。

そんな中、遊びに来ていた誰かが、知らずに禁断の昆虫部屋の襖を開けよった。

「うわっ―」という驚いた声とともに、バッタやコオロギが出てきました。

慌てて虫を追いかけました。その中に大きなクモもいました。市内の子でクモをつかめる子は少なく、バタバタしながら「お前行け」とかやっているうちに、誰かが焦って蹴りよった。

一瞬です。「バッ！」ゴマを散らしたように一斉に子グモが散らばった。

「ヒェー」もはや、バッタどころではない。

「何やってんの、あんたら」大騒ぎになりました。

この兄弟、今度は「せっかく楽しみにしていた花火が雨で出来ない」という理由で、それなら家で花火をしようと、部屋の中でロケット花火に点火しました。怖いですよ、火が消えるまで、狭い部屋の中を花火が暴れまわります。

芸術家って変わっていますわ。

【懐かしい商売もいろいろありました】

わらびもち

屋台を引いて、町の決まった場所に、小柄なおばあさんが定期的にやってきました。

客寄せの拍子木を叩く音が「チョン♪チョン♪」というので、子供達は「チョンチョンのおばちゃん」と言っていました。

夏はわらび餅、冬はおでん。

今「おでん」と呼ばれているのは、当時は関東煮（かんとだき）と言いました。

おでんは、串に刺さったコンニャクや、イモを味噌で食べるもの。
辛子味噌で食べる餅もあって、美味しかったなぁ。

折り紙細工

近所に流行っていたそろばん塾がありました。
ちょうど塾が終わる頃、前の道路に椅子を置いて、おっちゃんは現れます。

材料は、折り込みのチラシや新聞紙。
器用に折り込んで、尻尾を引っ張ると首が動く馬や鶴、紙風船などを作り、集まってくる子供達に配ります。
ひとついくら?などの価格表示も無く
「金くれ!」とも言いません。
手持ちがある子は5円、10円と持っている小銭を渡していました。
おっちゃんは聾唖者で耳が聞こえず、言葉も話せない。身振り手振りを交えた折り紙の実演を定期的に見ていると、子供達も自然に、おっちゃんの意思が理解できるようになり、
「手話」というものを知りました。

ゴム銃

男子はだいたい銃や乗り物が好きです。この人も商店街の外れに定期的に現れ、実演しながら針金で出来た銃を子供相手に売っていました。

原理は輪ゴムを指にはめて撃つのと同じです。色んな種類があり、同時に2発撃てるもの、連射式など。

子供の人気遊びは「撃ち合い」です。

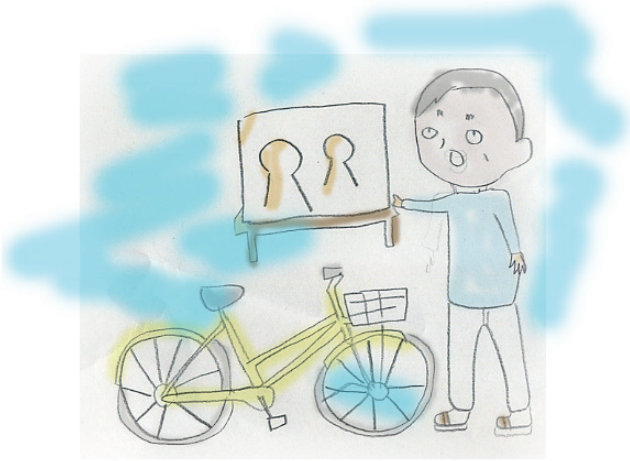
そんなリクエストに応えて行くうちに、だんだん破壊力も増して行き、梱包用の太い輪ゴムを弾にした進化系が現れました。

これは強力です。段ボールに穴が開き、発泡スチロールが粉々になる。

小学校の掲示板に穴を開けて発覚し、ゴム銃禁止になってしまいました。

紙芝居

公園に来ていた「紙芝居のおじいさん」この人、喉に穴があいていて、普段は白いガーゼで喉を覆っている。



紙芝居をする時は、そこへ管を入れて声を出していました。
「ゴロゴロゴロ」うがいをしているような音と共に、物語をしゃべっていました。
落語家のような話し方と、唯一無二の味ある声だったなぁ。

あたりや

悲しい銭儲けですわ。
「疎開道路」は歩道が無く大きく曲がっているため、車のスピードは余り出せません。
そんな条件下、貧しさの残る当時の世相を反映して「あたりや」が横行していました。
「あたりや」は、だいたい車が動きだしてすぐか、止まる寸前に車の前に飛び出てきます。
その頃の車は、バックミラーがボンネット上に付いていたので、タイミングがずれるとミラーに引っかかって大けがをします。
大抵は小遣い稼ぎで、数千円ぐらいを要求してその場で示談です。
それを知る近隣の人は「疎開道路」を余り車で走らなかった。だから交通量は少ない。

泣き女

コリアンの職業で「泣き女」というのがあります。
葬式時に、3人ぐらいチョゴリを着たお婆さんが来て、身振り手振りも交えて「アイゴー〜アイゴー」と大声で泣いて、故人を送りだします。
そういう職業があるのは知らなかった。
「おじいちゃんの葬式にしては、えらい大げさな悲しみ方やな」と思いました。

ひと仕事が終わった後、今度は大声で笑いながらタバコを吹かしている。
そのギャップにビックリしました。

傷痍軍人

当時、四天王寺のお大師さんや祭り等に行くと、義足や義手と、白装束に脚立姿で軍帽をかぶった元日本兵?姿が、アコーディオンやハーモニカを演奏しながら、前に箱を置いて、金銭をもらっていた。

傷痍軍人とは、戦争で体の一部に傷を負い、その後、仕事につけなかった方々で、国が認定して恩給が出ていました。

ある時、四天王寺で傷痍軍人3人がアコーディオンを演奏していた。弟たちを戦争で亡くしている祖母が、いつものように手持ちの小銭を箱に入れていました。

帰り際に天王寺駅近くのうどん屋にいると、さっきの傷痍軍人たちが入って来て、注文した天ぷらうどんが運ばれて来た。
そして、ひとりがおもむろに義手を外すと、

「そんなアホな！」

そこには普通の手が?
もうひとりは吊っていた腕を抜き、普通に動かせて割り箸を器用に割って食べはじめた。

腹がたちますわ。こっちは素うどんなのに。

※四天王寺：弘法大師の月命日、毎月21日は俗に「お大師さん」と呼ばれ、境内に露店が並び、たくさんの参詣者で賑わう。

たのもし講

近所のおばさんなどが胴元となって、商売人や職人からお金を集め、必要な時に貸すという、一種のねずみ講です。

「現金が一番」保険や銀行に頼れない人たちが、かなり多く加入していました。

屋台のおっちゃん

疎開道路を南に、勝山通を渡ってだいぶ行くと、パーク劇場という映画館があり、その前あたりに屋台があり、「でんでらりゅう」という、不思議な唄のレコードも出していて、フォーク歌手兼占い師として、ラジオ等にも出演していました。

※この曲、定期的にリバイバルしますね。

鶴橋国際商店街

高校生の頃、ここを中心に様々なバイトをしました。最近、「町や人は、昔の方が良かった」と聞きますが、果たしてそうやろか？

ＪＲ環状線では、後ろの車両では平然とタバコを吸って床に投げ捨てる。街角やパチンコ店も然り。痰つぼもその辺にあり、オッサンが

「カーッ ペッ！」

この商店街は、朝は早いが夜間は迷路状で、ほぼ真っ暗。

大声での夫婦喧嘩は日常茶飯事。
多くの職業が入り乱れ、みんな必死で働いていた。
そんな当時のスケッチです。

パンツ屋

女性のパンツを安売り販売するデブオヤジの店。
このオヤジ、カエルがカツラを被ったような風体ながら、店はいつも人だかりが出来ていた。
正月の福袋争奪戦のように、パンツに群がる綺麗なお姉さんたちにカルチャーショックを受けました。
香具師のような口上のあとに、集まった客に対して商品を販売する。
決めゼリフは、腹の底から響くダミ声で
「ウチのパンツは違うでぇ〜。」

「ピシッと決まって食い込まない！」

デザインの仕事を初めてからは、記憶に残るキャッチフレーズは、看板屋のバイトで、町角のタバコ屋のシャッターに、夜中に相当数をレタリングした、CABIN の「軽さに味がある」

これとパンツ屋が、条件反射的に脳に浮かんでくる。困ったものです。

※香具師（やし）：フーテンの寅さんの職業。夜店や祭りで口上をしながら物品販売をする人。

玉造日通

高校生の夏休みは、引っ越し手伝いのバイトをしていました。

トラックの運転手とペアで荷物を運ぶのですが、当時は運搬道具が少なく、何でも人力で運んでいて、特に布団や冷蔵庫が大変だった。

綿の布団はともかく重い。布団袋に入れて何往復もすると、屈強な大人でもかなり疲れます。

町工場、特にネジや金物は20センチ角の箱でもひとりで持ち上がらない。小さな箱を二人がかりで持っている時など、オッサンと顔が近づきすぎて、

「コラ、気持ち悪いゾ！」

重いので息が上がる。

「ハアハア、言わんといてくださいヨ。」

などと言い合い、笑っていた。

でもね、当時はバイト料の他に、引っ越し先から心付けが貰えて、お昼に寿司を出してくれる事も多かった。特に住人が中年以上の方だと、その確立がアップします。

今の引っ越し屋さんは、ちょっとかわいそうかも。

荒巻ジャケ

日通で知り合った高君と一緒に、年の瀬に鶴橋駅近くに露店を出して「荒巻鮭」を売りました。

店主は何か所を掛け持ちしているようでしたが、

これはちょっとアカンという人物で、私と高に
「エエか、何時になっても全部売らんと帰せへんど」
といきなり凄みました。
そこは抑えて、銭儲け…銭儲け。

二人とも必死になって、大声で呼び込んだが、全然売れへん。
店主が「何としてでも、全部売れよ」と言って他の場所へ巡回に行ったので、何で売れへんのかを、誰かに聞いた方がエエな?と言う事になった。
知り合いが通りかかったので
「おばちゃん、全然売れへんから買って!」
「三千円!って、あんたとこ高いから嫌!」言われた。
次のおっさんには、一歩踏み込んで「なんぼやったら買う?」「千五百円〜まだ高いか。こんなハッキリせん店なら、千円がエエとこちゃうか?」
「オオッ!これやったんや。値段が高かったんや」
おつりも面倒なので、単純に千円にしたろ。
売れました。次から次にお買い上げです。現金入れている段ボールが、千円札で一杯になった。
店主が帰ってくるなり、鮭が無くなっている

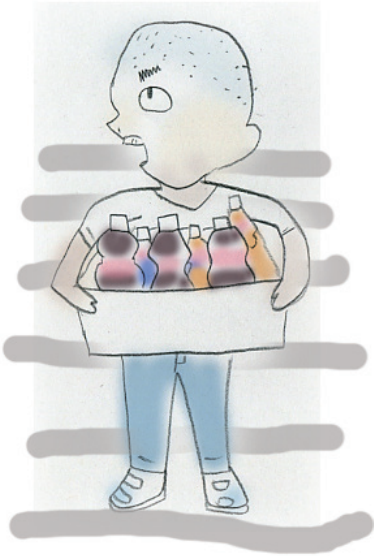
「おおっ！すごいやんけ～。やるな」満面の笑みです。
「何か飲みたいもの言え」などと言いながら、段ボールのお金をまとめて、勘定をしはじめました。
「アレッ？だいぶん少なくないか？」
「つり銭、まちごうてないか？」
「うわっ、そんなどころやあらへんがな」
「コラッ 何でや！」

「1本 千円で売ったよ」

「エエッ！」絶句しよった。
店主は焦りだして「誰と誰が買いよった！」
「どこ行きよった！」
かなり狼狽していました。私と高は黙秘「…」。
少し収まったので、バイト料を貰って帰ろうと思い「もうする事が無いのでバイト料ちょうだい？」と言いました。
アホかっ！お前ら！
えべっさん、いや、我孫子さんでも、汗流してもらうで！」と凄んだ後に、ため息をつき「まあ、売れ残らんかったから、おまえらの大好きな千円だけあげるわ。ケッ！」とくれよった。
「やっぱり、俺らには物売りは向いてないなぁ～」と二人で笑いながら帰りました。
もちろん、えべっさんも我孫子さんも行ってません。
※我孫子さん：住吉区のあびこ観音。当時の商売人や職人は、初詣～清荒神～今宮戎～あびこ観音と、新年はお参りしていた。

コーラ売り

「コーラいかがですか？コカコーラに
ファンタオレンジいかがですか？」



「ビールに〜するめェ〜♪」

アナウンスしながら、客席を回るバイトです。

最初は、森の宮の中央大通り沿いにあった日生球場です。

近鉄バッファローズの本拠地でしたが、いつもガラガラで客が少ないため、歩合性のバイト料は微々たるものでした。

まあ、ただでプロ野球を見られるし、それよりオッサンのヤジが辛辣で、とにかく面白い。

近鉄vs南海、両方とも弱いし、試合がしょぼい。

当時、監督兼任だった野村克也さんが代打で登場すると、近鉄ファンからも喝采ですわ。

その後にカコーン。ヒット打たれた

「コラ野村ぁ♬〜真剣に野球してどうすんねぇん」

「バットはベットでふれよぉ♬」品ないですわ。

奥にある更地。盛り土をしているところが、
ニッセイ球場跡地です。

バイト仲間から声がかかり、甲子園でも売り子をしました。

阪神vs.巨人となると、人もいっぱい。

ニッセイ球場とはえらい違いですわ。

最初に行った時に、通路を抜けてバックネット裏からスタンドを見上げた時、その人の多さに圧倒されて「コーラいかがですか」が発声できなかった。

「コーラいかが…」声が萎んでいきました。

慣れてくると売り上げアップには、余り歩き回らずに、派手なおねーちゃん達を連れて来ている、おっさんグループの近くに陣取って、野球を見ながら声がかかるのを待つ。

タイガースが勝っていると上機嫌。大負けでも「やってられるかい！」と、ヤケ酒を次々注文してくれる。

これが一番カタイ。

ウロウロすると、試合に興奮した酔客に「見えへんゾ―、どけ」とか言われて、トラブルになるしね。

文具屋

店主がユニークで、商魂がすごかった。

顔や雰囲気が横山やすしに似ていてスキンヘッド。

それで、近所の人や親しい客には

「ハゲのやっさん」

と言われていた。

メーカーの展示会と聞けば、店員、バイトだけでなく家族総出です。

そして「コレ」という景品や粗品が有れば、ローテーションを組んで、何回も貰うために巡回します。

「キミ、その角から回って、此処とココ…の順番。エエかっ、全員あのデスクマットは必須やで」

という調子。

また、抽選が有る場合は「君の誕生日は？」

「はぁっ？」「オオッ、六白金星か。今日はアカン！」

瞬時に占い師にかわります。

必ずその日の運勢の良い人が、抽選をしていました。

そして、客寄せのお勧め特価として店で売ります。

「エエか！安く仕入れて、高く売る」

「小さく高価なモノは、場所をとらずに金が儲かる」

よく言っていました。

当時は在日一世、二世の時代。鶴橋周辺はそういう方々が多い。

電話が鳴る。

「はいっ○○です」と店の名前を言った後に、突然しゃべり方が変わります。

「アッ　チョデスカ　ボルペン　ヒトケスネ」

（そうですか。ボールペンひとケースですね）

電話先の話し方で在日だと判断すると、同胞をアピールするため、声態模写をします。

反面、買わない客はバッサリ！

「タメタメ、サワルナ、アッチイケ！」

彼らに同胞だと思ってもらうと、商売がしやすい。

特にコリアン達が冠婚葬祭で使う「焼き紙」は、油紙のような嗜好品ですが、中ぐらいの段ボールひと箱で数万円する。店主を同胞だと信じ安心して、言い値で売っていました。

当時の鶴橋は「石を投げれば極道に当たる」と言われたぐらい「頭にヤが付く自由業」の方が多い。

連絡手段も乏しい時代です。

電柱に「○○組の皆さん。本日は中止です」

そんな張り紙などもあったらしい。

組事務所もわかりやすい。

前の道には綺麗に打水がしてあり、入ったら「あれ、今日は祭りか」と思うぐらい提灯が吊ってある。

中には、大きな組があり、豪華な扉を開けると、まるで宮殿のような吹き抜けに、３ｍ以上あるブロンズの騎士像が鎮座している。びっくりしました。当然、その方面のアイテムも充実していました。

名刺の印刷からはじまり、「破門状」「絶縁状」各種儀式の小物まで…箔押し代紋が定番です。

彼らには、余計なセールストークは必要ない。

「あちらさんより、エエもん出来ましたで！」

潔癖症

文具屋の客に○○組があって、ここの組長は超が付く潔癖症らしい。そして、とにかく新品が大好き。

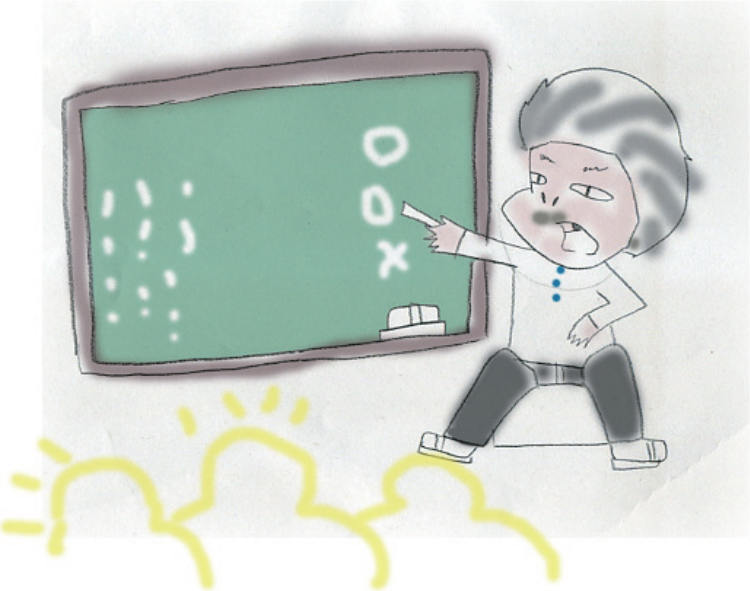
ボールペンのインクがちょっと減って、中の管に薄いグレーと黒、色の差が出来たらもう使わない。やっさんに言われた通り、「引き取り分ありますか？」と必ず聞いて、よく見ないと、新品と区別できないボールペンをまとめて持って帰りました。それは、普通に店で売ります。

時に驚いたのは、まだホワイトボードの普及していない時代です。

何故か黒板の注文を、ほぼひと月ごとにする事です。黒板のチョークの跡は、しばらく使うと中々消えなくなります。本人はそれが気にいらない。

機嫌が悪くなるのを避けて「そろそろかな」という前に、組員から発注がありました。

現金で払うし、単価の安い文具関連の商品群では、かなり高価！



店にしてみれば良い客ですわ。

ある日の配達時、その黒板を前に年配の組員?が若手を前に朝礼のような事をしていた。

ひとりの若者が怒られていて、

「ハイッ!」

「わかったか?」

「ハイッ!」

「ハイッ!ハイッ!って、お前は　馬追いか!」

そしておもむろに

「エエか

人のふんどしで顔をふく

ようなマネをしたらあかんど!」

「意味わかるか?」

「エッ?ハイッ!　小声で…相撲を取るでは…」

「何!ぶつぶつと何や!」「ハイッ!」

「ぐふっ…」

緊張の中で笑いの壺に入ると、収拾がつかなくなり、思い切りせき込みながら逃げました。

ある配達日、事務所の新しい黒板に書かれた、几帳面な性格そのままの言葉。

「朝は掃除と挨拶」「整理　せいとん」

「出前は勝手にとるな」…等

最後に今月の一言とあり、丁寧に上から2度書きの太い文字で、

「人のふんどしで顔をふく　ようなまねはしない」

そんなやつ誰もおらんやろ。

間違いの指摘も出来ない世界なんやなぁ

バイトも終わる頃、焼肉「鶴一」で送別会をしてもらいました。

だいぶビールも回ってきて、居眠りのはじまったやっさんの傍らにいた奥さんが

「ウチの店、大変やったやろ。けったいな客や、ややこしい業界にまで手をだして」

「ウチの人もえげつない人間やと思ったんちゃう？」

そんな風には全然思ってなかったのですが

「実はね2年前に店から火が出てね。

店がまる焼けになってん。

しかも自分の店だけでなく、両隣やら周辺にも迷惑をかけてしまって」

「それまで主人は、二代目のボンやったんやけど、

その時に髪の毛も一気に抜けて…」

「とにかく、皆さんに納得いくように、その弁済を早くしないとアカンと言って、必死に働くしかないと、

今のようなやり方になったんよ」
こんな話は苦手です。どう返答して良いかわからず
「へー。ほんで、
人間は誰も丸こげにならんかったんすか？」
トンチンカンな返しをしてしまった。
ふと、前で寝ているやっさんの顔を見たら、鼻の穴が膨らんでいる。

こらえきれずか「パッ」っと目が開いて
「丸こげは髪の毛だけ。人間はみんな無事。
ワシもそれが救いやった。キミ出世するわ　ハハハ」
（いまだに出世とは無縁ですが、ハハハ。）
奥さんもお母さんも、他のバイトも笑っていました。

バイトが終わってしばたらくして、店主から電話がありました。
「キミ、ロッカーにセーター忘れているで！」
「すんません。また、取りに行きます」
「早よ来ないと、店で売るで！ ワァーハハハ」
あれから40年近く、とうとう行かなかったなぁ。

現在の鶴橋国際市場とコリアンタウン

ＪＲと近鉄の高架下まわりや駅周辺。
昼間でも焼き肉の臭いが充満しています。
駅の西側は、焼肉屋街。高架下も日が暮れると屋台や店に灯がともります。
東側が、戦後の闇市からそのまま続く商店街。
細い路地が東西南北に走り、日韓のお店が入り混じっています。（韓国にかなり押されぎみ）
冬場の平日なのに、びっくりするほど賑わっています。

疎開道路の方向、東に向かって路地を歩いていると、店から声がかかります。

「メガネの兄ちゃん、食べてって」チジミのお姉さん。

私がバイトしていた頃に比べて、キムチや韓国食材を売る店は極端に増えています。

店舗が空くと、コリアンショップが入るという状態で、空き店舗は少ない。

だいぶ歩いて鶴橋商店街近くになると、昔から営業している店が増えてくる。

魚屋のおばはん「兄ちゃん。このフグ、さっきさばいたばっかりで超！新鮮や」

「毒も新鮮ちゃうの？」

「ハハハ。アホ言うなや。50年やっているけど、あたった人は今までわずか2人やで」

「えっ。あたっているやん！」「ハハハハハハ」

「兄ちゃん、今日の当たりはアンコウ！美味しいよ」

「ハハハハハハ」

道が狭いので、単に呼び込みでは無く、直接声がかかる。

とにかく、人が多いし賑やか。

本来、商店街はこんな感じやったもんなぁ。

丹波屋

ブティック
女性用 靴屋
中央商店会

TEL 972-2266

前方３メートル
むし豚
とん足
徳山商店玄徳

土曜市
SALE

すごい数の店が、ほぼ全店営業してます。

和素材の店も多い。かつお節、ちりめんじゃこ、線香、お茶の専門店も（生野区鶴橋 国際市場）

写真からも辛さが伝わりそう（生野区鶴橋 国際市場）

広 退 狭 道 今 が ウ 材 こ 元

鋳掛屋さん。鍋・窯の修理と販売。包丁研ぎも。日本一の腕とある。（生野区鶴橋 国際市場）

ソカイ道路
信号の所で
営業してます